



## 大下敦史ゆかりの集い、追悼！記念講演会／懇親会（2018年6月17日）

前・情況出版代表の大下敦史が逝ってから6か月が経ちました。

彼は「情況」誌を引き継いでから約20年、厳しい活字離れ、出版業界の中で、また、論壇の急速な右傾化の中で、いわば孤高を保って「情況」を守り出版を続けてきました。

新自由主義が跋扈し、思潮においても、現実の運動においても、「情況」が出発した“68年”当時と様変わりし、“体制変革”志向の衰退するなかで、松明を掲げ、知識人、運動家の輪をつないできました。

そして、リーマンショックと2011年以降の世界同時の新たな運動の波の中で、「情況」を通してそれを解析し、また運動の輪を広げるチャレンジをしてきました。その途上の死でした。残念であつたらうと思います。

そのような大下敦史を偲び、生前ゆかりのあつた山本義隆氏、白井聡氏の協力を得て両氏の講演を交えた追悼会／懇親会を2018年6月17日に開催いたします。ハワイ留学中の愛娘、朝子さんが帰国しているこの時に開催することをご理解頂き、ご多忙かと思いますが皆様方のご参加をお願いします。

（呼び掛け人代表 新開純也）

共同発起人 大谷行雄（義弟） 大下朝子（長女）

呼び掛け人 山本義隆 白井 聡 新開純也 米田隆介 表 三郎 末井幸作 山中幸男

### 式次第

第一部 講演会 神田錦町・学士会館 203号室（108人収容） ☎03-3292-5936 会費：2千円

6月17日(日) 午後3時～5時 司会挨拶 辻 恵／福井伸一

発起人 開会挨拶と謝辞 大谷行雄

呼び掛け人 挨拶 米田隆介

重信房子メッセージ代読 山中幸男

追悼メッセージの紹介 福井伸一

記念講演 白井 聡

記念講演 山本義隆

質疑応答 辻 恵／福井伸一

呼び掛け人 挨拶 新開純也

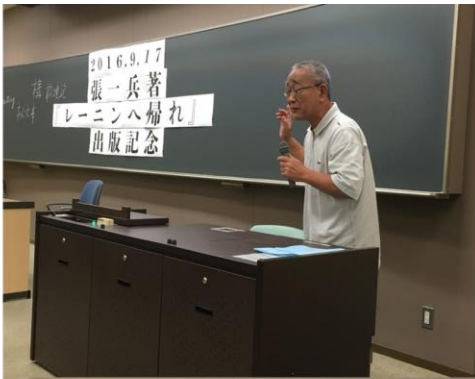
発起人の閉会挨拶と謝辞 大下朝子

第二部 懇親会 御茶ノ水「祭」(50人収容) ☎03-3233-3332

6月17日(日) 午後6時～ 会費：3千円（飲み放題つまみ付き）

お問い合わせ、参加予約先：大谷行雄

電話：080-4617-9028（SMS対応）Mail：[yukiohtani@gmail.com](mailto:yukiohtani@gmail.com)



大下敦史 (おおした あつし) さん

● 「情況」元編集長 大下敦史



「歩ける状態じゃなかったんだよ。あと4ヶ月でなんだかんだと言われていたからね。これだけは人生の区切りだと思って来ているからね。」

1947年生まれ。広島県因島出身。中学高校時代は体育会で鳴らすが、高校3年の時、レーニンと出会い、社会主義へ開眼。早稲田大学へ進学する。入学後は、共産主義者同盟（フント）の活動家として、革命運動に尽力。現在、情況出版編集長。



# 義兄・大下敦史への想いと開催の挨拶

発起人共同代表 大谷行雄

義兄、前・情況出版代表の大下敦史が志半ばでこの世を去ってからはや 6 ヶ月が過ぎました。しかし、私は大下がいまだ成仏できずにいると思っています。それは、彼が手塩にかけ育み人生を賭して守ってきた情況出版によって開催されるべき追悼の催しが、よんどころない事情でこの間に開催されなかったからです。これは大下の功績を踏みにじる所業以外のなにものでもありません。

勿論、大下も生身人間ゆえ否定的感情をお持ちの方も少なからずいるとは思いますが、それらを踏まえた上でなおかつ故人を偲び評価する空間を共有するのが「人間」だと確信します。

それにこれは大下の遺志でもありました。勿論、生前は、或いは最後の最後まで自身の回復、復帰を疑わずに、今夏に予定されていた 10・8 山崎博昭プロジェクトによるベトナム・ハノイ反戦平和展示会に向けた旅行を楽しみしていましたし、何よりも 5 月頃に予定されていた情況創刊 50 周年記念ならびに全共闘運動 50 周年記念集会として自らその場に立つことを夢見ていたのですが、時に弱気になって「自分にもしものことがあったらその集会とともに自分の追悼会を盛大にやってくれ」と私に言い残していたのです。

そこで、ハワイ留学中の長女、朝子が納骨や後片付けなどの目的で一時帰国したこの機会に、所縁があり心ある方々にご協力をお願いして本会を断行することにいたしました。

義弟でしかない私が何故ここまでこだわるのかには二つの理由があります。

一つには、義兄大下は私の命の恩人と思っているからです。私は、いわゆる 7・6 明大和泉党内闘争に社学同高校生委員、大衆組織高校生安保闘争委員会(高安闘委)委員長として塩見さん等の赤軍派に参加し、結果中大叛旗派に拉致されたのですが、当時中間派と揶揄されていた大下が身元引受人として交渉、解放してくれたために、リンチを受けることもなく、また後の大菩薩峠以降の生死、人生を分ける闘争に関わることもなかったからです。更に、大下は私がアメリカから帰国後起業した会社が危なくなり自殺を考えるほど落ち込んでいるときにも精神的経済的にも助けてくれました。正に、実の姉弟以上の「絆」を感じていました。

第二の理由は、大下は晩年、私を大下自身の後継者として情況の代表代行を指名して以来、病気の発覚後も 10・8 山崎博昭プロジェクト展示会ベトナムホーチミン旅行に参加して皆さんに元気な姿を見せてくれ、末期の入院中誰よりも多くの時間情況の前途を話し合ってきたからです。当初は、私は出版業界ではド素人であり、海外生活が長い事から情況関係者に知己がないことを理由に代表代理就任を固辞したのですが、その「色」がないところが逆に良いのだと押し切られました。そして、多分私が 10・8 山崎博昭プロジェクト参加以来山本義隆氏と親しくさせて頂いていることを意味してか、「今年の全共闘運動 50 周年記念こそお前の出番だ！」と期待をかけてくれたのです。

これらのことを胸に秘め、本追悼会を企画し、その大下の期待に応えて山本義隆氏のご協力を仰ぎ、また大下が晩年非常にお世話になり大下も高く評価していた白井聡氏のご協力を頂き、大下流の大ブント構想の心意気で、旧ブント内の諍い或いは情況内部の揉め事を超越したできるだけ「色」のない集いにしたいと願って開催したいと思っています。永遠な情況の発展を祈って！

# 大下さんへ

2018年6月11日 榎原 均

7. 6がなければ君との出会いはなかった。それまで数年間、ブント関西地方委員会で労働運動を担当し、70年決戦に向けての「中央権力闘争とマッセスト」のスローガンにあったマッセストの準備に取り掛かり、7. 6のころは中電マッセストの党側の担当者だった。

しかし、この日、分離する前の赤軍派の軍団による暴力行使によって、彼らは、破防法の容疑者とされていた仏議長に大けがを負わせた後、防衛できずに逮捕させてしまった。その他のメンバーも負傷して、東京の指導部の欠員が生じ、急遽東京への異動が決定されたのだ。中電マッセストを、それまでのライフワークとしていた私にとってはこの異動は大変残念だった。

とりあえず住居も決まらないまま上京し、封鎖中の医科歯科大学で寝泊まりして、9回大会の議案書作成への協力から始め、東京の党活動になじんでいった。大会の後、どのような役職についていたのか記憶がないが、私は70年決戦の現場を担う若手将校たちと戦術会議などに党側を代表して出席することになり、君を始め、いろいろな分派の青年将校たち20数名と面識ができ、交友関係もできた。

年を越しても闘争は続き、青年将校たちとの濃密な関係は続いていたが、やがて荒が別党に踏み切ることで、分派を越えた戦術会議は解消され、以降君との関係も切断された。

君と再会したのは『情況』編集を君が引き受けた時だった。従来古賀さんがやっていた、私は古賀さんから寄稿依頼を受けていた関係で、君に代わっても寄稿させてもらった。それだけではなく、南京大学の張一兵氏来日の折には京都での会議の設定などもしてもらった。

申し訳なかったのは、ブントを再建するのだという話はしょっちゅう聞かされていたが、私はいつも生返事をしてきたことだ。晩年にはアジアで共産主義者を結集したいといていたね。

これはブント再建よりも可能性がある話だ。私は武装闘争の総括の後、80年代末に国際非合法党建設を追求していたが、このときは継続できなかった。最近国際非合法党建設ではないが、英文で発信するSNSを始めている。一般社団文化知普及協会という名称でHPも開設した。君のアジア共産主義者結集の努力も、このSNSで協力することができたと思うと遅きに失した。

しかし、後に続くものたちと協力して実現していきたいものだ。君の遺志を継ぐ人たちとの出会いと共同作業ができることを願っている。

# 大下敦史の「遺言」

村田能則

早稲田ブントの最初の同窓会が開かれたのは、「7・6」の分裂から、40年以上経った2010年頃。長い空白は、過酷な党派関係のせいである。党派闘争は、ブントの大きな汚点だが、早稲田はそのド真ん中にいたのである。各メンバーは、分裂した党派の中心になる場合が多く、同窓会など難しかったのである。

転換のきっかけは、72年の連合赤軍の同志殺しである。左翼を震撼させたこの出来事で、運動と組織は衰退の、長い坂を転がってゆく。同時にそれは、ブント系の各組織にとって、内ゲバ否定の長い、長い道のりの始まりでもあった。一方、革共同両派、革労協系の内ゲバは、逆に連赤以降に激化し、犠牲者も急増。構改系や第4インターを除いて、新左翼系の党派は殆どが内ゲバを肯定し、実践してきた。現在はあまりに大きな犠牲と、組織の分裂・衰退のせいで、暴力行使はひと休みのようだが、内ゲバ肯定の立場は変わっていないのではないか。

ブントを名乗る組織や、グループでは、現在、内ゲバを肯定、実践しているものはいないようだ。連赤排出の事実は重いだが、これは評価しても良いのではないか。

早稲田ブントの同窓会が始まると、大下や松平が連絡や運営を引き受けてくれた。大下と会って議論する機会も増えた。末期がんと闘った最後の一年間は、私が同じ病気で生き残った“先輩”ということもあり、連絡が急増した。

大下が最後まで気にしていたのが、やはり“内ゲバ”だった。我々はよく話し合った。残念ながら「内ゲバ止揚の論理」などは、見つからない。問題の核心はそんな魔法ではなく、「実際の運動」「現実的な判断」の方にあるのではないか。

「内ゲバ」は、実際の運動に、深刻なダメージをもたらす。仲間同士を出口のない争いに引きこみ、解体してしまう。一般の運動参加者は嫌悪と恐怖で、離れて行く。これは理屈ではなく、現実なのだ。

内ゲバの頂点は、連合赤軍の同志殺しだが、それはどこから来たのか、出発点は何だったのか、語られることは少い。連赤という怪物が、自分たちとは無関係に、ある日突然天から降ってきたのか。責任逃れのためか、そう主張する輩もいるが、そうではあるまい。

私と大下は、1968年のマル戦派との組織分裂に、重要な鍵があるのではという議論に向かっていた。

組織分裂が、学生運動の高揚期に当たっていたせいで、運動や組織に与えるマイナスが、当時はあまり意識されなかった。否、それ以上に、我々の間では、肯定的に評価されてきたように思われる。運動の退潮期であれば確実に、組織と運動は大きなダメージを受け、長期の分裂の泥沼にはまってしまったことだろう。実際には、この分裂の後、組織と路線はスッキリし、動員力も戦闘力も増強されたように感じたのである。全共闘運動が日本全国を席捲していた頃は、マル戦派との分裂を思い出すことは殆どなかった。

国際反戦闘争や、全共闘運動の高揚は、圧倒的だった。この“成功体験”こそが、党派闘争に関する間違った考え方を温存し、発展させたのではないか。「正しい党派闘争は、組織と運動を飛躍

的に発展させる」という確信。これはブント全体の共通認識になっていたと考える。

後に致命傷となるような棘が、そこに潜んでいるとは誰も考えなかった、これが大下の意見だった。「方針さえ正しければ、組織分裂はマイナスではなく、組織と運動を発展させる」。「正しい方針、正しい党派闘争の中では、暴力の行使も認められる」など。一言でいえば、「正しい方針(戦略戦術)」が絶対的で、この目的のためには何でも許される、こんな「教訓」を身に付けてしまったのではないか。この成功体験と傲慢さがが、我々を蝕んでいったと考える。

「我々は正しい方針をもっている」という確信は、間違った路線を主張する人々を、排除する権利を持つと考えられた。その後の様々な内ゲバは、この認識を変えることはなく、別の成功体験によって、更に補強された可能性さえある。その行きつく先には、凄惨な場面が待っているとは、誰も想像出来ない。誤りを止め、修正する手段を、内ゲバの成功体験の中に、置いて来てしまったように思われる。

マル戦派との分裂後、「スッキリした」我々が掲げた“正しい方針”は、「プロレタリア国際主義」と「組織された暴力」であり、それを更に深化させた(と主張する)赤軍派の「過渡期世界論・国際根拠地論」「前段階武装蜂起」によって、組織分裂が行われた。

私は「63年革共同の分裂」を別にして、新左翼の間で発生した内ゲバは、全て不必要だったと考えている。特にブント系で起こった内ゲバは、全面的に間違っていたと考えている。マル戦派、赤軍派、その他大小の全ての内ゲバが、意味がなく、してはならない分裂だった。

このレベルで分裂を繰り返していれば、大衆的信頼を背景とする、強力な革命党など、出来るわけがない。成熟した議論と、知恵によって、組織の統一を継続すべきであった。大下もこの考えに同意してくれた。

とりわけ、最初のマル戦派との組織分裂の「成功体験」が残した、大きな負の遺産に注目し、点検総括そして、謝罪までやり遂げなければならないという考えで一致した。

因みに「10・8 羽田闘争」のブントの戦術方針は、マル戦派の成島忠夫氏の仕業であった。当時は、優れた経済学、組織運営の能力、献身的戦闘性など、マル戦派の長所など誰も認めようとはしなかった。

塩見さんの死去とお別れ会を前後して、過去の内ゲバに対する謝罪の実例がいくつか伝わっている。しかし、マル戦派のことは誰も言い出さない。大それた革命的遺産など望むべくもないが、後世の革命家たちに“やってはならないこと”を、“やるとこうなる”という経験的資料に残すことくらいは、必要ではないかと考える。大下はこれにも賛成してくれた。文章として、はっきり残っているわけではないが、私はこれを大下の遺言と考えたい。

# 大下君を偲んで

2018.6.12 高原浩之(元ブンド・元赤軍派)

昨年2月に胃癌が判明し今年1月に亡くなるまでの約1年間、医師に病状の説明を受けるのにも同席したし、折に触れて、『情況』のことや朝子ちゃんのこと、さらには塩見のお別れ会のことなど、いろいろな話をしました。亡くなった当日も直前まで話していました。

## 『情況』の人民闘争と結合した発展を願う

大下君の生涯では『情況』が何と言っても大きいと思います。新左翼とブンドが党派の組織的に解体した困難な時期に、人民の大衆闘争と結びつける面で『情況』と大下君は大きな役割を果たしてきました。この会が、大下君の業績を引き継ぎ発展させる出発点になるよう願っています。

新左翼とブンドは、ベトナム反戦・70年安保闘争において、社共・総評ブロックより少数ではあったが、先頭に立って人民闘争を主導した。しかし、闘争に敗北し、党派の組織的にも解体した。

その原因は、依拠する社会的階級的基盤が基本的に学生に限られ(一部の青年労働者と結合したが)、この狭い基盤の上で情勢も見誤って日本帝国主義と決戦しようとしたこと、このように言えるでしょう。少なくともブンドはそうであった。赤軍派の革命戦争路線はその誤りの典型であり、その破綻が連合赤軍事件でした。

今日、グローバリズムと金融資本主義で日本資本主義の矛盾が深まる中、2015年反安保法闘争など、人民闘争が発展する情勢である。この人民闘争には数多くの具体的な課題があるが、その一つ一つに、新左翼・ブンド系の党派あるいは活動家による、「偉大な」と言うべき努力が存在していると思う。

大きくは民族・女性・部落など差別の問題や労働者階級「下層」の問題で、人民大衆と結合する、プロレタリア階級の階級闘争に依拠する、こういう努力が継続した。これこそが、今日、人民闘争が発展する情勢をもたらしていると思う。

大下君の『情況』はこの新左翼・ブンド系の党派および活動家と人民の大衆闘争との結合で大きな役割を果たした。新しい『情況』がこれを継承し発展させるよう切に願います。

## 70年闘争世代でケジメをつけておきたい

70年闘争を闘った、新左翼とブンドの活動家の間の人間関係は、党派の組織的に解体する過程で大きく破壊された。原因は「内ゲバ」と「リンチ」、これを党内闘争と党派闘争を持ち込み、それで組織を統制し維持しようとする、革命運動を長く蝕んできた体質、と言えるでしょう。

少なくともブンドはそうであった。第7回大会、7/6事件、連合赤軍事件、ブンドを崩壊させ、最後は人民闘争と革命運動に壊滅的な結果をもたらした。

大下君の『情況』は、新左翼・ブンド系の党派と活動家、言わば70年闘争世代がそれぞれに連絡を持ち、その中心に位置して交流を維持してきた。しかし、人間関係の問題は当事者がケジメをつけることがやはり必要であると考えます。

今日の人民闘争が発展する情勢で、革命と革命党の問題に必ず直面するでしょう。

ソ連が崩壊し中国が変質した現状からして、ロシア革命や中国革命を総括し、マルクス・レーニン主義そのものも総括し、社会主義・共産主義論を新しく構築する問題に必ず直面するでしょう。

新左翼とブンドの崩壊を総括し、新しく革命党を建設する問題にも必ず直面するでしょう。それは基本的には現在と将来の世代の任務でしょうが、70 年闘争世代も自分たちの経験を踏まえた総括を、言わば遺言として残しておくことは有意義であろう。

しかし、「内ゲバ」と「リンチ」の問題だけは、それが二度とくり返されないよう、70 闘争世代の当事者が過ちを反省する態度を表明しておく義務があると思う。それがケジメだと思う。

私は、連合赤軍事件については「塩見お別れ会」の場を借りたが、第2次ブンドから赤軍派結成に至る過程の7回大会と7/6事件の「内ゲバ」と「リンチ」についてはこの「大下ゆかりの集いの会」の場をお借りして、ここに謝罪と反省を表明します。

最後に、朝子ちゃんへ。大下君の生涯に学び、しっかり自分の人生を歩んで下さい。

## 大下さんとベトナムと蛇

椎野礼仁(書籍編集者)

珍しく大下さんから電話があった。去年の8月末のことだ。

去年の8月の19日、「10・8 羽田・山崎博昭プロジェクト ホーチミン6日間」の訪問団の一員として、ホーチミン市の戦争証跡博物館で開かれる“ANTI-VIETNAM WAR STRUGGLE AND THOSE DAYS IN JAPAN”EXHIBITIONに参加した。

20日のオープニングパーティではベトナムの民族舞踊があったり、こちら側からは山本義隆氏、佐々木幹郎氏の挨拶があったり、展示会では山崎君の写真などのほかにボロボロになった日大全共闘の旗や当時のセクトなどのヘルメットが並ぶなど、時代が遡ったかと錯覚。それをアオザイの女性が英語で説明するというシーンもあった。

このツアー自体も当時のベトナムの方二人との交流会があったり、解放民族戦線が200キロの地下壕を作ったクチ村や、3代経ても枯葉剤の影響に苦しむ子供たちをツーズ一病院に訪ねたり、とても有意義なツアーだった。

そんな中、ちょっと気を緩められる観光もあった。メコン川をクルーズして島に渡り、民族音楽を聴いての昼食のなど。その行程の一つで、ガイドが我々をいざなったのは、コブラ(?)のハグだった。大下さんの嬉しそうな顔。蛇嫌い人にとっては卒倒しそうなシロモノだ。実際、一緒に訪れたグループの中では、このように大蛇を首に巻いたのは、僕と大下さんぐらいだったかもしれない。

蛇は意外に濡れていなくて、想像よりも軽かった。体に巻きついているから軽く感じたのかもしれない。このときの大下さんは、すでに体調は悪かったのだろうと思う。

でも、傍目にはそんな様子は感じさせなかった。

東京に帰ってほどなく、この時の様子を、大下さんはご家族に話したらしい。冒頭の電話があったのはその時だ。「シーちゃん、家族が見たいと言ってるから、蛇の写真、くれないか」

それだけのこと。それだけのことだが、このとき、強面でならした50年前から知っている大下さんに、ほほえましいものを感じた。好ましかった。





## 大下さんを偲ぶ

絳 秀実

大下敦史さんを最初に見かけたのは、1969年の(多分、春か、あるいは初夏の)早稲田大学の第二学館のバリケードだった。学館の階段を厳しい表情をして(あるいはエラソーにして?)降りてくる人物を指して、私とともに階段を上っていた活動家が「あれが、社学同の大下だよ」と小声で教えてくれた。

駆け出しの活動家だった私は、その「怪異」な(失礼!)顔貌を、以来、忘れることができなかった。大下さんは、職業革命家(?)の典型的なイメージとして、深くきざまれたのである。しかし、その後30年ほどは、大下さんと接する機会には恵まれなかった。もちろん、当時、大下さんが私のことなどを認識するよしもない。

私と大下さんとの関係は、普通の意味では、決して良好だったわけではない。むしろ、トラブル続きだったと言ってもいいくらいである。

1969年から30年以上が経過した。大下さんと初めて面識を得たのは、大下さんが雑誌『情況』(第三期)の編集と経営を引き受けられた時で、『情況』誌の組版を担当していた、友人の府川充男の紹介による。その時、大下さんは、私に『情況』誌上で「文芸時評」をやるように求めた。

大下さんは私が何者かなどなど知らず、府川からのちょっとした情報をもとにしたアイデアだったのだろう。しかし、文芸時評というのは、月々の雑誌を通読せねばならない、多大な労力を要する仕事である。『情況』が原稿料の出ない雑誌であることを知っていたが(すでに私は執筆者ではあったから)、「それで、原稿料は幾ら出るのか」と尋ねた。すると、大下さんは突然怒り出したのである。原稿料など要求するとは、トンデモないということだった。『情況』に書くのは、左翼ポラン

ティアなのだという意味である。私は、左翼の「甘え」を批判して、しばらく言い争いになった。

私としても、「左翼ボランティア」を一概に否定する者ではないが(それは、すでにやっていたし、今でもやっている)、いくらなんでも無償で文芸時評をやるほど経済的な余裕とヒマがあるわけではないのである。

しかし、二人の言い争いは、府川の絶妙なとりなしによって、割に簡単に収まった。その後は、一気にフレンドリーな歓談に移行したと記憶している。あの大下さんの顔貌が、一挙に親しみ深く思えてきた。それ以降、何度か、府川も交えた酒席があった。

その後、大下編集長時代の『情況』に登場する機会も何度かあったが、そうそう円満に関係は推移しなかった。私は2008年の春以来、『情況』に執筆拒否に入ったのである。その間の事情については記せば長くなるので省略するが、私の方からの経過説明と見解については、今なおネット上にころがっているのを、参照されたい。<http://d.hatena.ne.jp/seijotcp/20080410/p2>

「裏事情」(?)を推測すれば、私(たち)の行動と見解は、当時の大下さんにとって、大下さんが当時ひそかに(?)推進しようとしていた「大ブント構想」のジャマだったのであろう。

しかし、執筆拒否をしたら、それで縁切りといかないのが、大下さんである。その後も大下さんは、何事もなかったように、あの人懐っこい声で、何の屈託もなくしばしば電話をくれ、時には酒席までセッティングするのである。私も、執筆拒否のことは括弧に入れて、大下さんに応じた。大下さんも「いいかげん」なら、私も「いいかげん」なのだ。大下さんとの話は、いつも楽しいものだった。貴重な話も多うかがった。それは、大下さんの晩年まで続いた。私は、大下さんの「いいかげんさ」を愛してしまったのである。

正直に言って、大下さんが出版人として、あるいは編集者として、有能であったかどうかは分からない。少なくとも、編集者としては、ちょっと困ったところもあったようには思う。

しかし、1969年に最初に見た大下さんの、あの「職革」的な(あるいは活動家的な)厳しさを内に秘めながらも、持ち前の明るい「いいかげんさ」で接してくる雰囲気、私は、ずっと愛していたわけだ。そのことだけは記しておきたい。

最後に、この会を主催する大谷行雄氏についても記しておく。大谷氏とは、氏がまだ高校生だった頃の、やはり1969年4・28の折、機動隊に追いまくられて蹴散らされた路上で、たまたま知り合い、大谷氏のお爺さん(多分)のやっている日本蕎麦屋(だったと思う)に連れて行ってもらって、お茶までごちそうになった。大下さんより早くに面識を得ていたわけである。それから40数年間は会う機会を得なかったが、その時の「友情」は、忘れがたいものであった。その後、四方田犬彦の『ハイスクール1968』で、大谷氏が最大の悪役を振られているのを読み、親しくしていたこともある四方田に対する、一抹の疑念が生じた。四方田に逆らって、断固として大谷氏を支持したいと思った。本稿は大下さんへの追悼であると同時に、1969年の大谷氏への一期一会に、少しでも報いようとして書いた。

## 故大下敦史君のご逝去を悼み心からお悔やみ申し上げます。

高校同級生、林 哲(Lim Chol)

私たちは1965年に東京都立大学附属高校を卒業した同級生でした。高校は一学年200人ほどで男女比が3対2位の小規模の都立高校で大体みな顔見知りであったが、彼とは同級生であったばかりかサークル活動の柔道部と卓球部の部室が隣であったことも手伝って、大変に親しみを感じた友人でした。高校生らしい馬鹿話を繰り返しては体力面のみならず人間的な温かさや包容力を大いに感じ、その魅力的な人物像に強く惹かれたものでした。

以来およそ数十年間、直接の交友は途切れ、2015年夏の終わりに『情況』誌に原稿を依頼されたことをきっかけに直接会って話ができただけなのが、高校の親しかった同級生として50年ぶりであったことは不思議な印象を与えるかもしれませんが、大げさに言えば私たちの世代にとっては背景に文字通り激動の歴史があったからと言っても過言ではないでしょう。

事実、『情況』の事務所を初めて訪れ、場所を変えて話続けた結果、たった二人で数時間以上を過ごしたことに気づきお店の方から閉店を告げられて驚いたのが昨日のこのように思い出されます。

詳細は省かざるを得ませんが、私は7歳のころ朝鮮戦争の難民として母親に連れられて渡日して以来、ずっと日本で教育を受けて来たわけですが、一浪して入学した大学では、授業料値上げ反対の全学ストライキが行われており、学生運動も盛んな時期でしたが、他方では日韓会談反対闘争後の朝鮮半島の状況も含めて、在日同胞学生たちの活動も活発で、私もそうした状況の影響の中で、個人的にはそれまで知り合いもいなかった同胞学生たちの活動に自然に参加するようになり、一年も経たないうちに高校の仲間たちとの交流は途絶えがちとなったのですが、ちょうどその時期に大学の裏門でばったり大下君に出くわしたのが学生時代に会った最後だったのです。

その時、偶然に会った嬉しさにどうしているのか、と尋ねた私に、自分は運動で忙しいんだ、と応えた彼が、私にお前は何をしているんだ、と少しいぶかしげに眺め、毎日、成田空港闘争が大変なんだと説明してくれた表情は今でも忘れられません。私も当時を思い出すと、朝鮮半島の問題により深く関わっていったように思いますし、そこに大下君の(オルグとは無縁の)姿勢のなにかの影響は否定しがたいと考えています。当時は学生運動にどう関わってゆかかということが私たちの世代にとっては大きな問題でしたが、以来高校の仲間と今日なお広い意味では社会運動にかかわっている友人が何人かおり、大下君と並んで気になる存在であり続けています。

というのは私自身、学生時代から当時の外国人学校法案や出入国管理法案などへの反対運動、韓国の朴政権の三選のための改憲反対闘争などに関心を持ち、日本の70年安保反対闘争などの社会運動に対しても深い関心を持たざるを得なかったからです。

そして私は風の便りに聞く社会運動に邁進している大下君というイメージを持ったまま、大学院に進みました。それは研究者を目指してということではなく就職のチャンスもほとんどなかったため金はないけど就職もなかった(当時、在日韓国人の場合)ので、当時自分が置かれていた情勢を少しでも学問的に理解できれば、と考えただけだったのです。

その後、当時は育英会の奨学金も外国籍の人間には与えられなかったため毎日の生活に追われながら自分の無能さのため研究もろくろく進められなかったのですが、年だけは重ねて大学に

職を得ることができ朝鮮を中心とした東アジア国際関係論を研究・教育する仕事を続けてきた結果、その仕事を通じて再び大下君に巡り合うことになったことが大きな喜びでした。

私の主要なテーマは朝鮮戦争とその周辺の現代史なのですが、今から考えますと数年ほど前に、当初別の出版社によって発表される予定であったシンポジウム『朝鮮戦争という経験』上・下(『情況』2011年6・7月号、8・9月号)という原稿が事情で『情況』に掲載されることになりその原稿の校正について、ある日突然、自宅に電話があり自分は雑誌『情況』の編集長の大下というものですと名乗って、「貴方は生年はいつで、高校はどこですか」と聞くわけです。私もびっくりして「えーっ、大下くん」と応じ、「君はこの問題の専門家らしいね」、「近々会おう」とあまりの事態に直面して本当に驚いたわけです。

私も、大下君がすでに相当の歳月を『情況』の編集長として活躍されていることを正確に知らず、ラディカルな雑誌という印象を持っていたからです。大下君は「君の意見には問題点がすべて尽くされている」とも激励してくれ、のちに2015年の安倍談話に対する論評の原稿を依頼され、それによって50年の時間・空間を超えて友情が今日によみがえってきたのです。以来、彼は日本は東アジアから学ばなければならないとして、私に自身の周辺の人物を紹介してくれると同時に、様々なことを教示してくれいろいろと協力してゆこう、ということでこの閉塞状況の中で一筋の光明を見出したかと感じた私に昨年の春に「俺、癌になっちゃった」と聞いた時は、正直あの頑健な大下君がガンに負けるとは考えられないと非科学的にも考えてしまい、昨年の12月には、『情況』の朝鮮半島特集の原稿の件で頭がいっぱいで年が明けて、電話をしてみたら「昨日亡くなりました」、というお嬢さんの返事に茫然自失となった次第ですが、今もどうしても彼が亡くなったということが実感できないのです。

大下君が社会に対する深い批判から出発し、持ち前の正義感と他者に対する包容力、温かさ、粘り強さで、実践運動家として、出版社の経営、雑誌の編集者として稀有なリーダーシップを発揮して困難な生涯を生き抜いたその生に心からの敬意を捧げます。

林 哲 津田塾大名誉教授、朝鮮現代史、東アジア国際関係史  
〒185-0014 東京都国分寺市東恋ヶ窪 3-18-15-302  
042-326-5530 090-7260-3348

## 大谷行雄さま、メール、ありがとうございました。

ベン@沖縄のタカラです。

冠省。故・大下敦史さまの「訃報」、拝受しました。とても、残念です。心より、「御冥福を」祈ります。大下さんには、『情況』への原稿やインタビュー記事等で、とてもお世話になりました。これから、深い親交が始まると思っていた矢先でした。

かえす返すも、残念です。大下さんから、「沖縄へ『情況』を毎号贈呈するから・・・」との有り難いメールも、いただいております。

住所等を書いた「返信」を、まだ出してないまま、連絡が途絶えてしまいました。きっと、入院でもなさっていたのでしょうね……。

大下さんとは、沖縄でゆっくり飲んだことしかありません。東京へ行くときは、もっと会える機会が欲しかったです……。

この度の、「前・情況代表 大下敦史ゆかりの集い 追悼！講演会／懇親会」には、残念ながら参加できません。沖縄はいま、辺野古新基地建設阻止闘争が大きな山場を迎えています。来月7月には、空港予定海域の埋め立て・土砂投入が始めるのではないか、という観測が流されています。

私は、この辺野古新基地建設阻止闘争を始め、諸「沖縄闘争」を持続的に半永久的に闘い書き続けることで、大下敦史さまのご遺志に応えて行きたいと決意しています。

遺されたご家族や、ご親族、関係者の皆様に、心から「ご愁傷さま」と申しあげます。また、雑誌『情況』のますますの発展を祈っています。合掌。

2018/06/03 高良 勉(詩人・批評家・沖縄大学客員教授) 拝

〒901-1103 琉球弧・南風原町与那覇438-10 電話:090-9788-1414

(PS:この「弔文」を、懇親会等で、朗読、公表してもかまいません。)

## 大下敦史さんを追悼して

ピョンヤンかりの会 小西隆裕

大下さん、こういう文章を書かねばならなくなり、本当に残念です。

貴方とはもう一度お会いしたかった。会って、これからの日本のこと、闘いのこと、いろいろ話し合いたかった。

私自身、貴方とお会いしたのは、二度きりとなりました。一度目は、東大安田講堂の付近で。そして二度目は、22年前のピョンヤン。貴方は、われわれの宿所に松平さんと二人で訪ねてきてくれましたね。田宮さんを亡くし傷心のわれわれに対する貴方の思いやりが身と心にしみました。

今、情況は動いています。朝鮮半島をめぐり北東アジアが動き、その新時代の波動が日本に押し寄せてきています。貴方が人生の最後をかけようとしたアジアと日本の問題が、今こそ、いつにも増して切実にわれわれの前に提起されてきているように思います。

日本が朝鮮に、そしてアジアに、アジアの外からでなく中からどう向き合いどう対すべきか、今問われてきている問題の大きさは、50年前、いや150年前にも匹敵し、それを超えるものになるのではないかと思います。

貴方の無念を思いながら、ご冥福、一層深くお祈り申し上げます。

# 大下敦史さんありがとう

リッダ闘争を思いつつ 五月三十日 重信房子

明るく朗らかな便りで大下さんが胃癌の末期にあると伝えて下さったのは、去年の春だったでしょうか。驚き、癌患者の先輩として語るうちに、大下さんはそれからベトナム行きを敢行し、旅行記の原稿を送って下さり、思いきり生きている様子に励まされて、私もブント総括の方法を提案した矢先に突然の電報で訃報を知らされました。

正月の静かな病房で「大下さんありがとう」と心を鎮めながら、永別の挨拶を送りました。

同世代の社会学仲間でありながら、六十年代当時、私は大下さんを知りませんでした。早稲田の村田さんは私の社会学同加盟の推薦人の一人だったし、荒さんは明大や中大によく出入りしていたし、斉藤さんやあべさんら女性たちとも顔を合わせ、活動を共にすることもあったのに、大下さんとは、そんな機会がありませんでした。

去年の十一月頃の便りで、私の文から小学校・中学校時代には、世田谷の隣の学区域らしいと知らせて下さいました。どうも御近所だったのですが、交流の機会には恵まれませんでした。

私が二〇〇〇年の帰国時に逮捕された後、『情況』誌に「冒頭意見陳述書」を掲載して下さったり、かつてのブント・社会学同の縁で交流の機会が生まれました。そして、パレスチナからライラ・ハリドさんが訪日された際も、共同して下さいました。

多忙の中、短い十分程の面会にも足を運んで下さいました。最高裁の刑確定直前に、小学六年生の朝子ちゃんと共に最後の面会に来て下さって、「あと十数年なんてすぐだから」と励まして下さったのを思い出します。

マーガレットの花を思わせる楚々として美しい少女、朝子ちゃんは、お父さんが大好きで、一緒に出かけるのが嬉しそうでした。「でもね、お父さんね、時々お鍋を焦がすのよ」と教えてくれました。お父さんは「何を言うんだ！ハハハハ」と嬉しそうに照れ笑いしていました。「観念的」で「極楽とんぼ的」なところが見受けられると思っていた大下さんの印象は、朝子ちゃんの登場でなんてすばらしい親子なんだろうと、がらりと変わりました。愚痴は言わないけど、すべて苦勞を寛容に引き受けている大下さん、これが大下さんの姿だと実感しました。暖かい人です。

受刑処遇の中、私が抗癌剤治療と、手術を繰り返していたころ、二〇一五年二月、米国から旧友の城崎さんが強制送還され、そのまま逮捕拘留されたころのことです。

大下さんから『情況』誌に中東情勢の分析など原稿を書いてほしいと依頼されました。獄外には中東情勢などを書ける専門家もいるし、私の友人たちも書けるでしょう。それに獄では、資料入手も不十分だし、検閲で時間もかかるし、受刑処遇では無理と返事を一度は返しました。彼から再び依頼があったころ、私は、三月警視庁と検察庁の任意取り調べがあり、拒否しました。

それから一週間程して、突如、病房に「ガサ入れ」が入りました。四人の公安刑事が、狭い独房を一時間以上にわたって捜索を行いました。何という嫌がらせでしょう。憤りと共に、「まてよ……彼ら公安は私を『現役扱い』している。それなのに私は、受刑処遇に甘んじて受動的になっているのではないか？せつかく現役扱いされるのなら、それにふさわしい仕事をしなくちゃ！」と目覚めさせられました。

こうして、大下さんの誘いを受けて、『情況』誌に二〇一五年から中東情勢について書き始めることになりました。大下さんの寛大な原稿受け入れに気を良くして書きだすと、書きたいことが溢れ、書くことがとても楽しくなりました。大下さんありがとう。機会を与えて下さると、お礼を伝えました。

『情況』誌は一九六八年のブントが主導した八月の国際反戦集会(米・仏・独からラジカルな代

表が参加した画期的な集会)にむけて、春から出版を準備し、変革のための総合誌として企画されたものです。当時私は、明大の文学研究部で「駿台派」という雑誌の編集長をしていたことを知っていた松本礼二さんと、専修の前沢さんから、この新雑誌の編集スタッフに入ってほしいと誘われたことがあります。ちょうど卒論で多忙で、また、社会批評や革命論は私の任ではないと辞退しました。当初は、詩や文学論なども考えていたので、私を誘ったそうです。そんな五十年前になる因縁を思い返しながらか、大下編集長の下、情況誌に楽しく書かせて頂きました。

六八年に、ブントが描き、持っていたあのような変革の総合性は、いつのまにか政治主義に狭められ、更に権力問題から、軍事へと短絡していきました。ブントの多様な連合性を否定し、マル戦派排除にはじまる「純化」過程は、「七・六事件」の過ちから「連合赤軍事件」へと自己対象化しえぬまま進み、敗北していきました。

大下さんは、ブントを愛した人々の思いを、情況誌の中に受けとめ続けていました。大下さんは、良くも悪くもブントを代表する一人だったと、しみじみ思い至ります。

共にブント総括を語り尽くせなかったけれど、遅れて彼岸に向かう私は、大下さんが誘って下さったことで再発見した“書く中東”の楽しみを、これからも命尽きるまで行使していこうと思っています。

大下敦史さんありがとう。彼岸での再会まで！

獄窓の落暉<sup>らつき</sup>を赤旗代わりとし 歌いて葬送<sup>おく</sup>らんインターナショナル

PS: 今受け取った白井聡さんの新著の巻末に「本書を、大下敦史の思い出に捧げる」とあり、嬉しくなりました。